



尾久西だより

荒川区立尾久西小学校
発行日 令和3年2月26日
発行者 校長 芝田智昭

No. 358 3月号

啐啄同時（そったくどうじ）

様々なことがあった令和2年度が締めくくりの時期を迎えます。異例の状況が続いたため、保護者・地域の方々には例年以上にご心配・ご不便をおかけいたしました。これまで教育活動が展開できたのは、みなさまのご理解とご協力があったからだと思っております。ありがとうございました。

さて、表題の「啐啄同時」とは、絶好の機会、または、学ぼうとする者と教え導く者の息が合って相通じることの意味します。加えて、鳥のひなが卵から出ようと泣く声（啐）と、親鳥が卵を外からつつく（啄）のが同時であるからの解釈もあります。ひなが卵から出る準備が整い声をあげても、親鳥がそれに気づき殻を破ってくれなければひなは外に出られません。逆に、親鳥が早く我が子を見たくて殻を破ったとしても、卵の中のひなが十分に成長していなければ元気には育ちません。

これは教育においても同じことが言えます。子どもの好奇心を刺激し「不思議だな。」「どうしてかな。」「もっと知りたいな。」との学ぶ意欲を高めて、最も効果的なタイミングを見極め、適切な指導をすることが求められます。子どもの意欲が十分でないときに、教員が言葉を尽くして知識を伝えようとしても学習は成立しません。子どもが学びたい気持ちを高めているのに、教員が見過ごし効果的な働きかけをしなければ、子どもが成長する機会を逸してしまうこととなります。

6年生が卒業を目前にしたこの時期、私は毎年「啐啄同時」を考えることが多くなります。卵を小学校に例えて、卵の中で過ごした6年間で、卵の外にある中学校に向けた力を身に付けさせることができたでしょうか。教職員を親鳥としたとき、子どもたちの成長を見とり、最適の時期をとらえ背中を押すことができたでしょうか。

今年度を振り返ると、6年生は尾久西小の大黒柱として学校を支えてくれました。制約がある中、一つのことを成し遂げようとする子どもたちの思いと、それを支援して伸ばそうとする教職員の心が合致した瞬間がありました。手前味噌かもしれませんが、そうした場面で啐啄同時が実現できたのではないかと、思っています。

残り1か月、卒業生も在校生も次の学年への構えをしっかりとつくり、新しい環境でも自分らしく力を発揮できるよう指導を進めてまいります。

<学校評価>

年末にご依頼した学校評価について、結果を集約・分析し、その概要を裏面に掲載しましたのでご覧ください。

次年度の教育活動に反映してまいります。